

新規就農者のナシ樹体ジョイント仕立ての取り組み支援

倉吉農業改良普及所

1. 取組の背景

神奈川県で開発されたナシの樹体ジョイント仕立ては、密植した苗木を同一方向に伸ばし、隣接する苗木に接ぎ木（ジョイント）することで1本の主枝として、そこから直角に結果枝を発生させる整枝方法である。

この仕立て方法の優れている点としては、結果枝が一直線に並ぶため作業動線が単純でわかりやすいこと、初期収量に優れること、樹勢が均一化しやすく長さの揃った結果枝が得やすいことなどが挙げられ、栽培経験が浅く、経営開始直後に低所得期間が発生しやすい新規就農者に適した技術と言われてきた。しかし実際に取り組んでみると植栽後の管理がうまくいかず、接ぎ木できるだけの新梢伸長が得られないなどの失敗例も多く見られる。

一度失敗するとその後の回復も難しく、経営基盤が脆弱な新規就農者にとってはダメージが大きい。そこで、導入に積極的な新規就農者M氏に対して、完成すれば非常にメリットの多い樹体ジョイント仕立ての樹形を確実に作り上げることを目標に支援を行った。



写真1 ナシの樹体ジョイント仕立て

2. 活動内容

(1) 育苗方法の指導

平成22年冬に鳥取県オリジナル新品種「新甘泉」と鳥取大学育成新品種「早優利（さゆり）」の苗木が植栽され、翌23年から育成管理が行われた。このときの

育成目標は、1年間で接ぎ木（ジョイント）ができるだけの新梢伸長量を確保することであった。そのため苗木1本1本に添え竹を取り付け、新梢の伸長にあわせて順次誘引するよう指導を行った。

適切な管理が行われた結果、苗木部分を含めて4m近い枝長を得ることができた。しかし同年9月に襲来した台風12号によって多くの苗木が途中から折られてしまい、その年の接ぎ木（ジョイント）は不可能になった。

（2）台風被害からの復旧

平成24年、前年に発生した台風による枝の折損被害により、枝の伸長に再度取り組むことになった。植付け2年目の当年は根も十分活着して十分な枝の伸長が得られると判断し、不測の事態による枝の折損に備えて各苗木から複数の枝を伸長させた。前年と同様に添え竹に順次誘引するよう指導した結果、本年も4m程度の枝長が得られた。

翌春の接ぎ木準備として、新梢伸長停止後の9～10月にかけて伸長した枝を水平に引き倒す作業を行った。2年育成になったことでその分曲げる部分が太くなり、曲げにくく折損する枝もあったが、新梢を複数本伸ばしていたことでほとんどの苗木で問題なく引き倒すことができた。

（3）ジョイント（接ぎ木）方法の指導

平成25年3月、苗木同士のジョイント（接ぎ木）方法について指導を行った。作業方法の説明は既存の接ぎ木マニュアルを活用しながら行った。このほ場には176本のジョイント仕立て向け苗木が植栽されており、限られたジョイント（接ぎ木）の適期に1人で完了させるのが難しいこと



写真2 湯梨浜町農村青年会議による接ぎ木作業

と、複数人で作業した

方が効率的であることから、湯梨浜町農村青年会議の会員に協力を依頼し、JA職員や普及所も応援して園芸試験場担当者の指導を受けながら実施した。その結果、1日で接ぎ木作業は完了し、ジョイント仕立ての基本樹形ができあがった。

（4）新梢誘引方法の指導

「新甘泉」は1度果実をならせた果台に花芽が着生する率が低い。これは「早

優利」においても同様であることから、せん定方法の簡略化も狙って腋花芽利用の長果枝せん定を選択した。長果枝せん定を行うためには腋花芽の着生が十分である必要があるため、7月に新梢誘引を実施するよう指導した。これによって腋花芽の着生が促進されるとともに、せん定時の誘引が行いやすくなった。

(5) せん定方法の指導

平成 26 年 1 月に果樹専門技術員および園芸試験場担当研究員を講師として招き、果実を着果させる側枝のせん定指導を行った。実施にあたってはジョイント（接ぎ木）に協力した湯梨浜町農村青年会議の会員や、単県補助事業を活用して樹体ジョイント仕立てに今後取り組む予定の生産者に参加を呼びかけた。

講師の指導を受けてみると、樹体ジョイント仕立てのせん定方法は慣行のそれと異なる面が多かった。従来法でせん定作業を進めた場合、樹体ジョイント仕立てに特有の整然と並んだ側枝が配置できなかつた可能性も大きく、今後の作業にあたって大いに参考にすることができた。



写真3 樹体ジョイント仕立てのせん定講習会を開催

3. 具体的な成果

(1) ジョイント仕立て樹形の完成

不測の事態により当初予定よりも 1 年後となってしまったが、ジョイント仕立ての基本樹形を作り上げることができた。県内でも取り組み事例が増えてきているこの仕立て方法であるが、ここまで行き着くことができない事例も多いと聞く。1 本化された主枝から結果枝を発生させることができる体制を整えることができ、この仕立て方法におけるモデル的な優良園を作り上げることができた。

(2) ジョイント仕立てのPR

接ぎ木（ジョイント）作業の実施にあたって広く協力を募ったところ、町農村青年会議のメンバーを中心に若手農業者が参加することになり、ジョイント仕立てのPRになるとともに、技術指導も行うことができた。実際に作業を体験することでジョイント仕立てに対する興味もさらに深まったところがある。その後単県の補助事業（「新甘泉」ニューモデル園設置事業など）を活用して、この仕立て方法に取り組みたいとする意向を示す農業者も出てきている。

4. 農家等からの評価・コメント（湯梨浜町新規就農者M氏）

新規就農するにあたってせん定方法がわからず不安だった。ジョイント仕立ては初心者でも取り組むことができると聞き、就農と同時に取り組みを始めた。

水管理や誘引作業など苗木植栽後の管理は大変で台風の被害もあったが、ようやく樹形が完成したことで、今後の作業が大幅に簡素化されると期待している。

5. 現状・今後の展開等

平成 22 年の植栽から取り組みを初めて、来年度は初めて果実が収穫できる。今のところはせん定作業の簡略化を重視して腋花芽利用の長果枝せん定を選択しているが、この地区の主力品種である「二十世紀」とはせん定方法が全く異なるため、さらに理解を深めていく必要がある。

また「早優利」については品種そのものが産地導入後間もないため、その特性そのものが未知のところが多い。今後判明する特性にあわせ、発生する問題点に対して対応方法を協議・指導していくつもりである。

（執筆者：山本 匡将）